

受験機会の複数化と選抜方法の多様化

—— 不必要な複雑化を避けるために ——

広島大学 有元正雄

1 広島大学の実情

筆者が所属する広島大学は附属施設を除けば11学部より構成されている。入学試験は1学部1単位の定員によるものから、1学部内の学科・課程・専攻などに定員を配分して行うものまでさまざまであるが、ほぼ公的な定員の単位を1つのセクションとすれば合計47セクションとなる。

平成2年度の入試は、A日程をとる2学部8セクションと、連続方式をとる9学部39セクションに分かれて実施する。これに推薦入学を加えるものが7学部16セクションとなる。これらのセクションが、それぞれの入学者選抜に際し実施する選抜方法を、大学入試センター試験・個別学力検査・小論文・実技試験・面接の主要な5つの方法に限って表示すれば表1のようになる。なお調査書の利用は全学部・全セクションのあらゆる日程などに共通するので表示を省略する。

1) 大学入試センター試験の受験科目数はほぼ5教科5科目で、一部4教科もあるが、大差はない。ただその利用方法、つまり個別教科の配点と合計点、および総得点に占める比率は多種多様である。また推薦入学にはこれを課さないセクションが多い。

2) 個別学力検査はほぼ2～3教科であるが、課する教科・科目は各セクションで異なる。後

表1 平成2年度広島大学入学者選抜方法

日程等	選 抜 方 法					セクション数
	1次	学力	論文	実技	面接	
前 期 A日程	○	○				37
	○	○	○			1
	○	○		○		4
	○			○		5
						(47)
後 期	○	○				4
	○	○			○	2
	○		○			16
	○				○	11
	○			○		3
	○		○	○		1
	○			○	○	1
	○					1
						(39)
推 薦	○				○	1
	○		○			1
	○					1
			○		○	11
			○	○		1
			○			1
						(16)

(注) 1次=大学入試センター試験。学力=個別学力検査。論文=小論文。実技=実技試験。

期日程で課するセクションは6セクションで、教科・科目数も少なく、大部分のセクションはこれを課さない。推薦入学では個別学力検査を課するセクションはない。

3) 小論文は前期・A日程では1セクションのみであるが、後期で17、推薦で14セクションと課するところが多い。そしてその予想される内容も、いわゆる小論文形式のものから、1～2

科目の教科内容に近いもの（個別学力検査に近いもの）までさまざまである。採点方法・配点も多様である。

4) 実技試験は教育系のセクションが、入学後の実技指導に関連する内容のものを課している。

5) 面接は後期で14、推薦で13セクションが採用している。この利用方法も各セクションで異なる。

6) この他に、高校調査書が各学部によってそれぞれ多面的角度から利用されていることはいうまでもない。

以上のようにみてくると、概して前期・A日程では「調査書+大学入試センター試験+個別学力検査」のタイプが、後期日程では「調査書+大学入試センター試験+小論文」のタイプが、推薦では「調査書+小論文+面接」のタイプが主要な選抜方法となっている。そしてこの3つのタイプは現在国立大学で最もポピュラーな選抜方法といえよう。

また、既に1大学といえども「選抜方法の多様化」傾向に即して、実に多様な方法で入学者を選抜しているといえる。

2 多様な選抜方法の効果と満足度

広島大学におけるこうした多様な選抜方法はここ数年来、徐々に形成されたものであるが、果たして多様化に見合う優秀な入学生を得ることができたであろうか。その効果が問題となる。また、この多様化が、受験生・高校側・大学側でどのように受けとられているか、その満足度である。この二点について述べてみよう。

いささか古いデータであるが、工学部第三類（科学系）・第四類（建設系）の推薦入学者につき、昭和59年度・60年度入学者の一般教育履修成績の比較が手元にあるので、それによってみると、両年度とも「一般入学者の成績よりも良好である」と報告されている。また筆者が最近聞いた2～3学部の事情も「推薦入学者は悪くない」との評価を得ている。そしてこの推薦入学については、各国公立大学も漸次拡大する方向にあり、また高校との入試説明・懇談会でも高校側から推薦制度を各学部・各学科等に拡大するよう要請されている。

推薦入学では高校の調査書が大きな意味をもつと思われるが、「調査書+小論文+面接」の主要なタイプが受験生・高校側から歓迎され、大学側もその結果にほぼ満足しているのである。

ところが、後期日程の発足は平成元年度からであり、軽々と結論めいたことはいえないが、後期日程における主要なタイプである「調査書+大学入試センター試験+小論文」は受験生・高校側から歓迎されていない。その理由は、上記のタイプは一般国公立大学が採用しているA・B・前期の「調査書+大学入試センター試験+個別学力検査」のタイプとは別個のタイプで、従って受験生・高校側には別個の受験対策が必要となる点にあるらしい。

とすれば、大学側は小論文を課さない、A・B・前期と同じタイプの選抜方法とするか、それは同じ方法の試験の繰返しで単なる敗者復活戦に過ぎず、二度入試を行う意味は少ない。また日程的にみても採点などの時間にかなり困難がある。

また、大学側としても後期日程において約

20～30％程度の入学者を選抜するために、小論文問題作成や採点に労力を費やし、果たしてそれにみあう効果があるか疑問に思うのである。

3 複雑な入試方法の改善のために

筆者の所属する広島大学文学部は昭和5年設立の旧制大学の系譜をふみ、創立以来、専攻(教室)単位に定員の定め、公的な定員は学科単位であるが、実質上専攻(教室)定員で入学者を選抜してきた。いま平成2年度入試に予想される定員の配分を示せば表2のようである。

みられるように総定員165名を15の専攻に分け、3回の入試で選抜するのである。そして3回とも選抜方法が異なる。すなわち、推薦入学は「調査書+小論文+面接」で、前期試験は「調査書+大学入試センター試験+個別学力検査」

で、後期試験は「調査書+大学入試センター試験+小論文」である。これだけの労力を費やして1講座の教室、例えばインド哲学教室は定員5名を1・3・1に分けて選抜するのである。そしてこの結果、受験生・高校側から歓迎され、かつ優秀な学生が得られるのか。結果は必ずしも良好とは思われない。

しかしさりとて、現在の制度の下でA日程やB日程をとっては定員の確保が困難と思われる。また専攻(教室)単位による小定員選考は広島大学文学部の特色で現在のところこの制度を変更するつもりはない。

選抜方法の多様化は現在の潮流のようであるが、これに受験機会の複数化(独特の複雑化)が加わって、多様化を必要以上に複雑化させており、受験生にも高校側にも大学側にも歓迎されないまま、三者が対策・対応に翻弄されているのが実情といえる。

そこで、大学にふさわしい入試制度を確立するために、その第1段階として、まず、受験機会の複数化(複雑化)を整理することによって、選抜方法の多様化(複雑化)を整理することを提案したい。

それは全国の国立大学・学部が、正規にはA日程か、B日程か一度だけ選抜試験を実施する方法である。A日程をとるか、B日程をとるかは各大学・学部の自主的選択に任せることである。そしてA日程合格者もB日程が受験出来るようにすれば、A・B両日程の総定員が極端に片寄ることもあるまい。また旧一期校・二期校的な弊害もかなり防げられると思われる。

かくして、正規のA・B両日程が多く「調査書+大学入試センター試験+個別学力検査」の

表2 平成2年度文学部の予想定員配分

学科	専攻	定員配分			定員
		推薦	前期	後期	
哲学科	西洋哲学	3	5	2	10
	中国哲学	3	4	2	9
	インド哲学	1	3	1	5
	倫理哲学	3	4	2	9
	(計)	(10)	(16)	(7)	(33)
史学科	国史学		9	2	11
	東洋史学		9	2	11
	西洋史学		9	2	11
	地理学		9	2	11
	考古学		5	1	6
	(計)		(41)	(9)	(55)
文学科	国語学		18	4	22
	国文学		9	2	11
	中国語学		18	4	22
	中国文学		9	2	11
	英語学		7	1	8
	英文学		7	1	8
	(計)		(68)	(14)	(82)
合 計		10	125	30	165

タイプをとると予想され、このタイプの選抜方法と、各大学がA・B日程より早く独自に実施する推薦入学における「調査書+小論文+面接」のタイプの選抜方法にほぼ二大別しうようになると思われる。これによって後期日程にみられる「調査書+大学入試センター試験+小論文」のタイプを省略整理することができる。

これは、受験生・高校側・大学側ともに不要なエネルギーを省略する有効な方法と考えられる。

しかし、本来大学の入試方法は日程以外にその内容において、外部からの何ものにも拘束されてはならない。各大学・学部が大学・学部の目標に合致するよう独自の選抜方法を構成すべきである。そうした独自性をもったときに「選抜方法の多様化」は文字通り確立するのである。これが第二段階の目標である。全大学構成員はこの問題に真剣に取り組まなければならないと思う。